

### 参考資料3 「学習成果」を重視した大学改革の国際的動向

#### 【アメリカ】

#### ○ AAC&U—教養教育のアウトカム (Liberal Education Outcomes, 2005)

全米カレッジ・大学協会 (AAC&U: Association of American Colleges and Universities) の 2005 年の報告書 (Liberal Education Outcomes) に記載。2004 年の全米の高等教育団体や認証評価団体の代表者らの共同作業の成果として、「専門分野や学問的予備知識によらず、すべての学生が学士課程段階において身につけるべき学習成果 (アウトカム)」として合意されたもの。

文化と自然に関する知識 (Knowledge of Human Culture and Natural World) :

- ・ 科学 (science)
- ・ 社会科学 (social sciences)
- ・ 数学 (mathematics)
- ・ 人文学 (humanities)
- ・ 芸術 (arts)

知的、実践的スキル (Intellectual and Practical Skills) :

- ・ 文章と会話によるコミュニケーション (written and oral communication)
- ・ 探求的、批判的、創造的思考 (inquiry, critical and creative thinking)
- ・ 数量的リテラシー (quantitative literacy)
- ・ 情報リテラシー (information literacy)
- ・ チームワーク (teamwork)
- ・ 学習の統合 (integration of learning)

個人的、社会的責任 (Individual and Social Responsibility) :

- ・ 市民としての責任とその遂行 (civil responsibility and engagement)
- ・ 倫理的思考 (ethical reasoning)
- ・ 異文化に関する知識と活動 (intercultural knowledge and actions)
- ・ 生涯教育への志向 (propensity for lifelong learning)

#### ○ アルバーノカレッジ (Alverno College) —Ability-based Curriculum

アメリカミルウォーキー州のカトリック系 4 年制女子大学 (AAC&U の会員)。1970 年代から、職場、家庭、市民社会において求められる 8 つの能力を定義し、これらの能力を養うことに主眼をおいた教育 (Ability-based Education) を実施。

- ・ **コミュニケーション (communication)** : 読み書きや会話、メディアを利用したプレゼンテーションなど、他者との間に関係性を作り、意味を生み出す能力。
- ・ **分析 (analysis)** : 明確かつ批判的に考え、経験や理論、訓練の成果を統合して思考を進め決定する能力。
- ・ **問題解決 (problem solving)** : 問題やその原因を定義し、判断や勧告、計画の実行に至る能力やリソースを駆使する能力。
- ・ **価値判断 (valuing in decision-making)** : 自らの倫理観を堅持しつつ、異なる価値観を認める能力。自らの判断における道德面を認識し、行動の結果責任を引き受けることができる。
- ・ **社交性 (social interaction)** : 委員会やタスクフォース、チームプロジェクトにおける物事の進め方を理解し、他者の意見を引き出しながら結論に導く能力。
- ・ **グローバルな視野 (developing a global perspective)** : グローバル世界における経済、社会、生物学的な相互依存関係を理解尊重する能力。
- ・ **効果的な社会参加 (effective citizenship)** : コミュニティに参加し、責任を負担。

現代的課題やその歴史的な経緯をふまえて行動し、リーダーシップをとる能力。  
・美的感受性 (aesthetic responsiveness) : 様々な形式の芸術にかかわり、芸術表現の価値や意味を認め、守ろうとする能力

○ インディアナ大学ーパデュー大学インディアナポリス校 (IUPUI) – Principles of Undergraduate Learning (PULs)

IUPUI(Indiana University-Purdue University Indianapolis)は、アメリカインディアナ州立のインディアナ大学とパデュー大学が共同して、1969年に州都のインディアナポリスに都市型研究大学として設立し、キャンパスの管理運営はインディアナ大学が受け持つ。1998年に学士課程 (Undergraduate) 教育において身につけるべき能力の定義とその成果に関する共通の枠組みとして、PULs(Principles of Undergraduate Learning)を策定。その基本的概念は、一般教育のみならず、専門分野の教育にも反映される。

**コミュニケーション及び数量処理に関わる中核的能力 (Core Communication and Quantitative Skills) :**

【定義】情報の表現や解釈、数量的分析、情報リソースや技術の活用を行う能力。

IUPUIの全ての学生が成功するために必要な基礎的能力と位置づける。

【成果】以下のような能力を身につけることが求められる。

- a. 文書や口頭あるいは視覚的な方法など、様々な形式で、他者に対してアイデアや事実を効果的に伝えることができる。
- b. アイデアや事実を理解、解釈、分析できる。
- c. ある範囲の条件下であれば、効果的にコミュニケーションがとれる。
- d. 数量的なツールや論法を用いて問題の解決策を特定し、提案できる。
- e. 情報リソースや技術を効果的に使うことができる。

**批判的思考 (Critical Thinking) :**

【定義】信条や行動を表わすような厳密な思考プロセスに纏わる能力。偏見を持たず、従前の信条や行動にとらわれず、新しい情報に基づいて自らの信条行動を修正しながら、批判的思考を進める能力。

【成果】批判的思考は覚え、理解することに始まるが、以下のような能力を身につけることによって、真の意味での批判的思考が実現できる。すなわち、偏見を認め、仮定を試み、帰結を見極め、論理的な結論に到達し、新しい問いを創り出し、探索し、挑戦的かつ複雑な問題を解決し、見識ある判断を下すために、知識や方法、プロセス、あるいは成果物を、

- a. 適用し、
- b. 分析し、
- c. 評価し、
- d. 創り出す

ことができる能力。

**知識の統合と適用 (Integration and Application of Knowledge) :**

【定義】複数の専門分野における情報や概念を、知的、職業的、地域社会的な生活において使いこなす能力。

【成果】以下のような能力を身につけることが求められる。

- a. 自らの個人的な生活を豊かなものにできる。
- b. 職業的な水準や能力を満たす。
- c. 社会の目標を推し進める。
- d. 伝統的な専門分野とそれらの境界とにまたがって仕事をする。

**知的深さ、幅広さと適応性 (Intellectual Depth, Breadth, and Adaptiveness) :**

【定義】専門的な知識獲得の方法を検討、組織し、それを特定の問題に適用する能力

<p>【成果】 以下のような能力を身につけることが求められる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>a. 少なくとも一つの専門分野を理解し、実質的な知識を有する。</li> <li>b. 異なる専門分野に関する知識について、相互に比較が行える。</li> <li>c. 問題解決へのアプローチを、その経緯や特段の理由に応じて修正できる。</li> </ul>
<p><b>社会と文化の理解 (Understanding Society and Culture) :</b></p> <p>【定義】 自らの文化的な伝統を認識し、人類の英知の多様性を理解、尊重する能力。</p> <p>【成果】 以下のような能力を身につけることが求められる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>a. 人類の歴史、社会、生活習慣の多様性や通用性の範囲を相互比較できる。</li> <li>b. 地域社会とグローバル社会の結びつきを分析し、理解できる。</li> <li>c. 複雑な世の中において、礼儀正しく振舞える。</li> </ul>
<p><b>価値と倫理 (Values and Ethics) :</b></p> <p>【定義】 個人的行動、市民性、美的感覚などの面で、深い判断ができる能力。</p> <p>【成果】 以下のような能力を身につけることが求められる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>a. 原則的かつ見識ある選択を行うとともに、その帰結を予測できる。</li> <li>b. 美と芸術を味わい、尊重する感覚を探求、理解し、涵養できる。</li> <li>c. 文化的、社会的、環境的、個人的な理由による様々な事情に関する倫理的な原則を理解できる。</li> </ul>

○ **大学生学力評価事業 (The Collegiate Learning Assessment)**

大学生がどの程度の学力を身につけたのかを測定する全国的な取り組みとして実施される試験。選択式ではなく、実践的作業 (performance tasks) や書き出しの定型語句 (written prompts) を用いて、学生の批判的思考 (critical thinking)、分析的論理付け能力 (analytical reasoning)、文章表現能力 (written communication) を評価する。教育支援審議会 (Council for Aid to Education) が実施主体であり、機関単位での分析を行っている。2002 年以降 134 の大学がこの試験を活用。

○ **SCANS レポート (1992)－職場におけるノウハウ (Workplace Know-how)**

産業構造の変化に関わらず労働現場において必要となる能力やスキルを明確化し、高等学校レベルまでの学校教育の改善に活用しようとするもの。アメリカ労働省長官の「必要なスキル獲得に関する諮問委員会」の答申として 1992 年に発表。

<p>能力 (Competencies) :</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ リソース (時間、お金、スペース、スタッフ) の活用</li> <li>・ 対人的スキルの活用 (チームワーク、リーダーシップ、交渉など)</li> <li>・ 情報の活用 (データ、ファイル維持管理、コンピュータなど)</li> <li>・ システムの活用 (社会的、組織的、技術的システムの理解)</li> <li>・ 技術の活用 (設備、ツールなど)</li> </ul>
<p>スキルと人格の基盤 (Foundation Skills) :</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 基本スキル (読み書き、数学、対話など)</li> <li>・ 思考スキル (創造的思考、判断、課題解決など)</li> <li>・ 人格 (個人的責任感、自尊心、社会性、自己管理など)</li> </ul>

(参考) 連邦教育長官諮問委員会報告書『リーダーシップが試される時』(2006) (抜粋)

中等後教育機関は学生の学習成果を測定し、報告しなければならない

- 高等教育機関は「大学生学力評価事業 (Collegiate Learning Assessment)」のように、在学してからの学力の伸びを測定する評価ツールや、「学力向上度測定事業 (Measure of Academic Proficiency and Progress)」のように教授と学習の質の向上をねらいとして、学部学生を対象とした一般教育の成果を評価するツールから得られた質的評価に関するデータを利用して、学生の学力を測定しなければならない。
- 連邦政府は、高等教育機関の内部管理や機関全体の向上を目的とするとともに、学生や政策立案者、一般市民がアクセス可能で便利な、教育成果に焦点を当てた共同利用型のアカウントビリティのシステムを開発する州や高等教育団体、大学システム、及び各高等教育機関に対して、インセンティブを提供しなければならない。
- 大学の教員団は、学生を対象とした教育目的の定義の策定、並びにこの目的に向けた向上の程度について証拠に基づく意味ある測定を可能とする方法の開発を中心となって実施しなければならない。
- 一定の期間の間に学生のスキルがどれほど向上したかを示す付加価値の測定を含め、学生の学力評価の結果は、学生にとって閲覧可能なものであるとともに、まとまったかたちで公表されなければならない。高等教育機関は、テストの得点、証明書や免許証の取得、学位取得までの期間、卒業率及びその他の関連する事項を含めて、中等後教育段階の学習に関連したすべての指標の情報をまとめ、アクレディテーションの要件の一つとして消費者に分かり易い形式で公表しなければならない。
- 学生の学力に関する州間比較を可能とする州立機関からのデータ収集は、50州すべてにおいて実施されるよう取組の振興を図らなければならない。成人の識字調査や免許取得、大学院や職業専門教育学部の試験、一般教養に関して特別に実施されるテストなどを利用することで、州の政策立案者は学生の学力に関する妥当性のある州間比較や、最も優れた実践及び不足した部分を明らかにすることが可能となる。連邦政府はこうした取組に対して、財政支援を提供しなければならない。
- 全米成人識字調査 (National Assessment of Adult Literacy) は、10年おきではなく、5年ごとに連邦教育省が実施するべきである。さらに、この調査のサンプルは、全国結果とともに、州毎の結果がわかるような十分な数としなければならない。また、同調査は、2年制、4年制及び総合制の各大学種の卒業者についてもサンプルをとって、調査分析を実施すべきである。
- アクレディテーション団体は、卒業率や学生の学力など成果として表れた業績を、インプットやプロセスと同様の優先度をもって、中心的な審査基準としなければならない。現行のアクレディテーションの審査基準を調整したり、拡大する際の枠組みは、(i)学力に関する成果とその他の業績指標に関連して各機関間の比較を可能とし、(ii)革新的取組や継続的な改善努力を促進するものであり、さらに(iii)各機関あるいは教育プログラムに対して、特定の使命については世界水準の質を備えるように努力すること、及び米国全土さらには海外にある同種の大学と比較対照して進歩の状況を測定可能なかたちで報告することを求めるものでなければならない。さらに、この枠組みは、最終審査の結果に一般市民が簡単にアクセスできるようにするとともに、アクレディテーション団体の管理運営機関や審査チームにおいて、政府関係者(公的セクター)や民間(セクター)の関係者の発言力を強めることで、アクレディテーションの過程が、よりオープンでアクセスし易いものとなることを目指している。アクレディテーションは、かつてはアクレディテーション団体と高等教育機関との間の主に民間制度の上のつながりとしてとらえられてきたが、今やアクレディテーションの公共政策としての重要性は増し、これを実施する者は公共的な目的に影響するところについて透明性の確保に向けた取組を継続し、加速化させなければならなくなっている。

## 【欧州】

- 欧州高等教育資格枠組み (The Framework for Qualifications of the European Higher Education Area, 2005) – Outcomes Descriptor

ボローニャ宣言に基づくワーキンググループによって検討され、2005年に報告された。第1～第3サイクルが、学士、修士、博士レベルに相当し、その内容は英国高等教育資格枠組み (後述) の(H)～(D)レベルと同様。

- 欧州資格枠組み (EQF: European Qualification Framework, 2006) – Learning Outcomes Descriptor

EU 諸国の多様な教育訓練システムを横断して、種々の資格について相互の比較を可能とするため、学習成果を8段階にわたって記述したもの。2006年9月に欧州委員会によって採択。レベル6～8が、それぞれ学士、修士、博士レベルに相当。

知識 (Knowledge) : レベル6 : 批判的思考を伴う先端的知識 レベル7 : 独創的思考につながる高度専門知識と批判意識 レベル8 : 領域境界における最先端知識
スキル (Skills) : レベル6 : 問題解決に必要な先端的スキル レベル7 : 新たな知識の開発につながる専門的な問題解決スキル レベル8 : 最先端かつ高度に専門化したスキルと技術
能力 (Competence) : レベル6 : 複雑な専門的活動の運営と個人やグループの能力改善 レベル7 : 新たな手法を必要とするような仕事の処理とチームの能力評価 レベル8 : 権威や革新性を示し、新しいアイディアの醸成に関与

- ボローニャ・プロセスについて

欧州域内の国際競争力の向上の基盤としての域内の学位等の国際的通用性の確保のため、2010年までに「欧州高等教育圏」を構築することを目指し、1999年欧州29か国の教育大臣が署名して「ボローニャ宣言」が採択された。

欧州域内の高等教育に学位システムと単位制度を中心とした共通の枠組みを構築し、人の交流と欧州域内の高等教育の国際競争力を向上させることをねらいとしている。

### 【主な内容】

- ①ディプロマ・サプリメント (学位の学修内容を示す共通様式) の活用による、比較可能な学位システムの導入
- ②最低3年の学部と大学院の2段階構造を導入
- ③欧州大学間単位互換制度(ECTS)を確立
- ④障害を取り除き、人の流動性を確保
- ⑤質の保証のためのヨーロッパ域内協力の推進
- ⑥高等教育におけるヨーロッパの特質を促進 (カリキュラム開発など)

その後、改革内容の進捗状況を2年ごとの会合で把握する「ボローニャ・プロセス」が進行している。次の会合は2009年にベルギーで開催予定。

### 【参考】

- ※ オーストラリアは、アジア太平洋地域において、同様の取組を行うことに意欲を示している模様。

## 【イギリス】

### ○ デアリング報告 (National Committee of Inquiry into Higher Education, 1997)

1996年5月に政府の諮問機関として発足した高等教育制度検討委員会(通称デアリング委員会)の報告書において高等教育のアウトカムとして挙げられたもの。

基本技能 (Key Skills) <ul style="list-style-type: none"><li>・ コミュニケーション (communication)</li><li>・ 数量的能力 (numeracy)</li><li>・ 情報技術の活用 (use of Information Technology)</li><li>・ 学習方法の習得 (learning how to learn)</li></ul>
知的技能 (Cognitive Skills) : <ul style="list-style-type: none"><li>・ 方法論を理解する力 (understanding of methodology)</li><li>・ 批判的分析力 (ability in critical analysis)、など</li></ul>
専門的スキル (Subject Specific Skills) : <ul style="list-style-type: none"><li>・ 実験技能など、専門分野毎の能力</li></ul>

### ○ 高等教育資格枠組み (The Framework for Higher Education Qualifications, 2001)

イギリス(イングランド、ウェールズ、北アイルランド)の高等教育機関が授与する5段階の学位 (Certificate, Intermediate, Honours, Masters and Doctoral)について共通の枠組みを与えるもので、学術的な水準に対する一般社会の理解と信頼を得ることを目的としている。1997年のデアリング報告をうけ、イギリス高等教育質保証機関(QAA: Quality Assurance Agency for Higher Education)によって2001年に公表された。(これ以外にスコットランドに関する同様の枠組みがある。)

<b>Certificate (C)レベル (サーティフィケートレベル)</b> 備えるべき能力 : <ul style="list-style-type: none"><li>・ 自らの学問分野における基本概念や原理を理解し、それらを評価、解釈できる。</li><li>・ 定性的、定量的データを提示、評価、解釈できる。</li></ul> 将来発揮することが期待される能力 : <ul style="list-style-type: none"><li>・ 自らの学問分野に関連する問題について、アプローチの適否を評価できる。</li><li>・ 自らの仕事内容について、整理され、一貫性のある記述を用いて、正確かつ信頼性をもって伝えることができる。</li><li>・ 組織的に整えられた環境において、さらなる能力開発・訓練を続け、個人の責任を果たすことが求められるような就労に必要な能力とスキルを身につける。</li></ul>
<b>Intermediate(I)レベル (ディプロマレベル)</b> 備えるべき能力 : <ul style="list-style-type: none"><li>・ 自らの学問分野で定説とされる原理とそれを導く過程を批判的に理解できる。</li><li>・ 自らの専門外の概念や原理を就業の内容に応じて適切に適用できる。</li><li>・ 自らの専門科目における探求の方法を知り、その分野における問題解決へのアプローチの適否を批判的に評価できる。</li></ul> 将来発揮することが期待される能力 : <ul style="list-style-type: none"><li>・ 技術を駆使して批判的情報分析を行い、その結果から解決策を提案できる。</li><li>・ 専門家、非専門家を問わず様々なかたちで情報交換を効率的に行うことによって、専門的な技術をうまく取り入れることができる。</li><li>・ 継続的な訓練やスキル開発を通じて、組織の中で重要な責任を負うにふさわしい新しい能力を獲得し、個人の責任を果たすと同時に、判断することが求められるような就労に必要な能力とスキルを身につける。</li></ul>

### Honours(H)レベル (第一学位レベル)

#### 備えるべき能力：

- ・ 自らの学問分野について、最先端の内容も含め、相互に密接な関係を持つ細かい知識を有し、その分野の主要な部分を構造的に理解している。
- ・ 専門分野における分析や探求の方法を正確に使うことができる。
- ・ 専門分野について、その最先端のアイデアや技術を用いた議論や問題の解決ができ、分野の現状を説明し、意見が述べられるような概念的理解をしている。
- ・ 知識の不確実性、あいまいさ、限界を正しく理解できる。
- ・ 文献や解説論文を利用して、自らの学習することができる。

#### 将来発揮することが期待される能力：

- ・ 学習した方法や技術を自らの知識や理解を見直し、高め、広げ、適用したり、プロジェクトの立ち上げや遂行のために使うことができる。
- ・ 問題解決のために判断を下したり、解決策を模索するにあたり、意見や仮定、抽象概念やデータなどを批判的に評価できる。
- ・ 専門家、非専門家を問わず情報、アイデア、問題点、解決策をやりとりできる。
- ・ 個人的かつ指導的な責任の行使、複雑で予測不可能な状況での判断、継続的訓練のための学習能力など、就労に必要な能力とスキルを身につける。

### Masters(M)レベル (修士レベル)

#### 備えるべき能力：

- ・ 自らの専門分野や職場の最前線によく現れるような事柄を構造的に理解し、現状の問題点あるいは新しい洞察を批判的にとらえることができる。
- ・ 自らの研究や、さらなる学問探究のための技術を包括的に理解している。
- ・ 専門分野における知識の創造・解釈のための既存の探求手法の使い方を実践的に理解し、知識を具体的に適用する際に独自性を発揮できる。
- ・ 専門分野における研究の現状や方法論について批判的に評価するとともに、それらを批評し、新しい仮説を提案できるような概念的理解をしている。

#### 将来発揮することが期待される能力：

- ・ 複雑な問題を構造的かつ組織的に取り扱い、完全なデータが無くとも深い判断ができ、その結論を専門家、非専門家を問わず、聴衆に対して明確に説明できる。
- ・ 問題への対処や解決にあたって、自らの方向性や独自性を打ち出し、職業的なレベルでの業務計画や実施においても自律的に行動できる。
- ・ 継続的に知識や理解を高度化し、スキルを高めることができる。
- ・ 個人的かつ指導的な責任の行使、複雑で予測不可能な状況での判断、継続的な職業訓練のための自立的な学習能力など就労に必要な能力とスキルを身につける。

### Doctoral(D)レベル (博士レベル)

#### 備えるべき能力：

- ・ 独自の研究や他の学問的知識を通じて、ピアレビューを満足させ、専門分野を前進させ、発表に値しうるような新しい知識の創造・解釈を行うことができる。
- ・ 専門学術分野や職場の最前線における知識の実体を構造的に把握・理解できる。
- ・ 専門分野における新しい知識、応用、理解を生み出すためのプロジェクトを構想、設計、実施し、予測不可能な問題に遭遇しても修正ができるような能力を有する。
- ・ 研究は先端的な学問探究に適用可能な技術を詳細に理解している。

#### 将来発揮することが期待される能力：

- ・ 専門的な分野における複雑な問題について、完全なデータが無くとも判断ができ、その結論を専門家、非専門家を問わず、聴衆に対して明確に説明できる。
- ・ 先端の基礎研究や応用開発を継続し、新しい技術の開発に実質的に貢献できる。
- ・ 個人的な責任の行使と複雑で予測不可能な状況での自律的な指導性など、就労に必要な能力とスキルを身につける。

○ 分野別学位水準基標 (Subject Benchmark Statements)

高等教育質保証機構 (QAA) は、第一優等学位に関し、学問分野別に授与される学位について、一般に期待される事柄、学位保持者が身に付けておくべき属性と能力を「分野別学位水準基標」として提示している (以下は4分野の抜粋)。各大学は、これを参考にして独自の学位プログラム (programme specifications) を作成する。なお、QAAは、機関監査と並行して、57分野ごとに分野別評価を実施する。

【経済学】

6. ベンチマークのレベル<sup>4</sup>

6.1 以下に提案されているベンチマークのレベルは、経済学の優等学位および、経済学を主要な構成要素とする他の学位のためのものでもある。経済学が重要な構成要素ではない学位を取得しようとしている学生は、これらのベンチマークの全てを達成することを求められることはない。

6.2 最低到達レベル (The threshold level)。最低到達レベルに達した経済学を専攻した学生は

- ・ 経済学の概念と法則の知識を説明できる
- ・ 経済学の理論とモデルアプローチの知識を説明できる
- ・ 学習プログラムに適切な量的手法とコンピュータ技術を認識し、どのような状況でこれらの技術と手法を使用することが適切であるかを理解している。
- ・ 経済学のデータおよび証拠についての情報源と内容に関する知識を説明でき、それらのデータの分析にどのような手法を用いれば適当かを理解している
- ・ 政策事項への経済学的論法の適用方法を説明できる
- ・ 経済学における一定の領域に関する知識をもっている
- ・ 多くの経済問題には複数のアプローチがあり、また複数の解決策があり得るということを認識している

6.3 標準到達レベル (The modal level)。標準到達レベルに達した経済学を修めた卒業生は

- ・ 経済学の概念と法則の知識を説明できる
- ・ 経済学の理論とモデルアプローチおよびその十分な使用方法について説明できる
- ・ 量的手法とコンピュータ技術に習熟しており、さまざまな問題に対してそれらの技術と手法をどう効果的に使うかを知っている。
- ・ 経済学のデータおよび証拠についての情報源と内容に関する知識を示し、それらのデータ分析にどのような手法を用いれば適当かを理解している
- ・ 政策事項への効果的な経済学的論法の適用方法を説明できる
- ・ 経済学における一定の領域に関する知識をもち、それらの領域における研究文献を知っている
- ・ 多くの経済問題には複数のアプローチがあり、また複数の解決策があり得るということに精通している

---

<sup>4</sup> この文書では、「知識」と「理解」は以下の意味を持っている。知識とは、教えられたように理論と証拠を再び用いる能力であり、理解とは構成要素の構造的かつ批判的な使用と分析ができることを指す。



## 【物理学】

### 6 到達の学術的基準

6.1 物理学の優等学位を取得する全ての学生は、上記の項目で提示した知識、能力、技能を習得したことを立証することが期待される、しかし、到達のレベルにはかなりの違いが必然的に存在するだろう。特に、学士課程コースを卒業する典型的な学生と修士課程を卒業する典型的な学生によって示される到達のレベルには違いがあるだろう。

6.2 この項目で述べられている知識の範囲と到達レベルは、第3項で概説されている。

6.3 評価されるものはカリキュラムの中に含まれる学習成果である。そして、学位授与基準の規定と手続きを確実に保証するという事は、各機関の責任である。その補正は機関の責任であるので、このステートメントでは扱わない。機関が補正・容認を認める場合、その手段が最低基準を満たしていることを保証すべきである。複数専攻の優等学位プログラムに適切な最低基準の要素は、出来る限りカリキュラムを通して決定すべき機関の問題である。

#### 学士学位

##### 最低到達点

優等学位は以下の到達を示す学生に授与されるべきである。

- ・ 物理学の法則と原理の基礎的な知識と理解、そしてそれらの原理の応用、
- ・ 問題を扱う時に関連する原理と法則を突き止める能力、
- ・ 実験や調査を行い、その結果を分析する能力。学生は結果の不確定性のレベルを評価し、それらの結果を予期された結果、理論的な予測、または公表されたデータと比較して、その結果の優位性を評価することができなければならない。
- ・ データの分析と適切な情報を検索するのに適切な IT パッケージ／システムの十分な利用、
- ・ 計算上の巧みな操作能力と、情報を図表化して提示し説明する能力、
- ・ 科学的な情報を発表する能力、特に科学的レポートを作成できること、
- ・ 自分自身の学習を管理し、適当なテキストと学修資料を利用する能力、
- ・ 実験プログラムにおける基本的な実験器具をよく知っておくこと。

#### 学士学位

##### 標準到達点

標準的な優等学位の保有者は、以下の到達を示すだろう。

- ・ 最も基礎的な物理学の法則や原理の知識と理解、そしてそれらの原理を物理学の様々な領域に応用する能力、
- ・ 適切な数学的手段を利用して物理学の問題を解決する能力。学生は、関連する物理学的原理を見だし、解決策を得るために必要な概算をつくることができなければならない、
- ・ 実験や調査を行い、その結果を批判的に分析し、妥当な結論を引き出す能力。学生は、結果の不確定性のレベルを評価し、それらの結果を、予期された結果、理論的な予測、または公表されたデータと比較できなければならない。彼らはこの文脈において結果の優位性を評価できなければならない、
- ・ データの分析と適切な情報を検索するのに適切な IT パッケージ／システムの有効利用、
- ・ 計算上の巧みな操作能力と、情報を図表化して提示し説明する能力、
- ・ 数学的技法を用いる能力と、物理的運動をモデル化する分析能力、
- ・ 科学的な情報を発表する能力、特に明確で正確な科学的レポートを作成できること、
- ・ 自分自身の学修を管理し、適当なテキスト、研究資料、他の学習資料を利用する能力、
- ・ 実験プログラムにおける基本的な実験器具およびその操作方法に精通しておくこと。

## 【人類学】

A 学科目の知識、技能、および理解：社会人類学	ベンチマーク	最低到達基準	標準到達基準
	<p>多様な観点から見受けられる、人類の多様性(例：社会的、文化的、生態的、生物学的多様性)および共通性の本質と領域(範囲)についての理解</p>	<p>多様な観点から見受けられる、人類の多様性および共通性の本質と領域についての基本的な理解を証明する</p>	<p>人類の多様性および共通性の本質と領域についての理解を証明し、多様な分析的視点を駆使してこれを説明する</p>
	<p>人類学的分析に活用される概念、理論および主要な研究方法の全体についての認識</p>	<p>人類学的分析に活用される概念、理論および主要な研究方法の全体についての基本的な認識を証明する</p>	<p>人類学的分析に活用される概念、理論および主要な研究方法の全体の活用について認識し、またその能力を発揮する</p>
	<p>グローバルプロセスと広範な時間的推移に関連した社会的かつ文化的形態の関係についての正しい認識</p>	<p>グローバルプロセスと広範な歴史的推移に関連した社会的かつ文化的形態の関係のうち、いくつかについての正しい認識を証明する</p>	<p>グローバルプロセスと広範な歴史的推移に関連した社会的かつ文化的形態の関係について正しい認識と理解を証明する</p>
	<p>人類学が同源の学科目とどのように関連付けられるかについての正しい認識</p>	<p>人類学が同源の学科目とどのように関連付けられるかについての正しい認識のうちいくつかを示すこと</p>	<p>人類学が同源の学科目とどのように関連付けられるかについて批判的な認識を示すこと</p>
	<p>様々な背景において人類学的な知識を適用する潜在用途への意識</p>	<p>様々な背景において人類学的な知識を適用する可能性についての認識を示すこと</p>	<p>様々な背景において人類学的な知識を適用する可能性についての知識と批判的な理解を示すこと</p>
	<p>人類がいかにして社会的、文化的、環境的な背景によって形成されるのかについての理解</p>	<p>人類が社会的、文化的、環境的な背景によって形成される方法を説明できる</p>	<p>人類が社会的、文化的、環境的な背景によって形成される方法を説明でき、また分析できる</p>
	<p>文化的前提に疑問を呈する能力</p>	<p>文化的前提に疑問を呈することができる</p>	<p>文化的前提に批判的に疑問を呈することができる</p>
	<p>人類学の学修対象に影響を及ぼす社会的かつ歴史的経過についての理解</p>	<p>人類学の学修対象に影響を及ぼす社会的かつ歴史的経過について正しい認識を示すことができる</p>	<p>人類学の学修対象に影響を及ぼす社会的かつ歴史的経過について正しい認識および理解を示すことができる</p>
	<p>文書的、口述的、そして視覚的な様々な形式を解釈し、分析する能力</p>	<p>文書的、口述的、そして視覚的な様々な形式についての基本的解釈や分析ができる</p>	<p>文書的、口述的、そして視覚的な様々な形式についての批判的解釈や分析ができる</p>

## 【音楽】

6.2 ベンチマーク・ステートメント	
<p>音楽学における優等学位の終了のため、および個々のプログラムにおいて特別に要求される内容に合致するためには、卒業生は以下の事柄を可能とする必要がある。</p>	
<p><b>知識と理解(知的技能)</b></p>	<p><b>標準到達基準</b></p>
<p><b>最低到達基準</b></p>	<p>左記の能力に加えて、馴染みのない領域の知識や、関連する学術的な文献と最新の研究を参照、評価、適用、挑戦する能力の表明</p>
<p>適切な演奏曲目および文献並びに関連する概念と問題の把握を含む、音楽学における単一もしくは複数の下位専門分野に関する知識の証明</p>	<p>左記に加えて、より深い理解のプロセスと、不明確な点や論点に関する批判的な認識の表明</p>
<p>音楽的な題材を分析、対処、調査、創造する能力と首尾一貫した伝達可能な形式により結果もしくは結論を発表する能力の証明</p>	<p>左記に加えて、音楽の理論的構築や、この理論がいかん音楽の創造、演奏、発信に関連しているかについての詳細な知識と理解の表明</p>
<p>音楽学における理論と実践の関係を理解し、相互関係を説明し、証明する関連技術や方法を利用することができること</p>	<p>左記に加えて、関連する習慣、問題、現象に対する批判的な関与や、その関連領域についての歴史的または最近の議論を評価する能力の証明</p>
<p>相応な範囲における歴史的、哲学的、文化的社会的な習慣、問題、現象に対する関係を含む、補足的な専門分野の幅広い知識の証明</p>	<p>左記に加えて、創造、革新、研究を目的とする音楽の学際的な性質が及ぼす影響への認識</p>
<p>学習する補足的専門分野がいかん芸術的で人間的、社会的、身体的な科学における同系の専門分野に関連するかを理解することの証明</p>	<p><b>標準到達基準</b></p>
<p><b>実践技能と音楽家精神</b></p>	<p>洗練した高水準で左記の能力が示せること、また楽譜が複雑、不完全もしくは非日常的である場合においても示せること</p>
<p><b>最低到達基準</b></p>	<p>左記の能力を高度に表現すること(より長く、複雑な題材を記憶し、内在化する能力を含む)や様々な楽譜や音源に対応する能力の証明</p>
<p>音程、リズム、音階、拍子、音響(音質、構造、楽器用法など)等の基本的な音楽言語の要素を耳で認識する能力とそれらを符号で表す能力の証明</p>	<p>左記の能力を組織が複雑もしくは不透明な場合でも高度なレベルで表現し、様々なアプローチがあるとの認識を示すこと</p>
<p>音楽の題材を記憶し、何らかの形式に記述されたもしくは符号化された音楽の音を読み、再編成する能力の証明</p>	<p>高度な技術的な技能、深い解釈レベル、幅広い個性の表現、創造的な作品の独創性により表現される個々の音楽的性格もしくは「声」の証明</p>
<p>音楽的な構成を、聴覚的もしくは楽譜を研究することにより認識(分析)する能力の証明</p>	
<p>実際の音楽を創ることの想像力と独創性の評価と適切な技術と解釈的な手段を用いた音楽による伝達能力の証明</p>	

○ ケンブリッジ大学 (Cambridge University) – Transferable Skills

ケンブリッジ大学では、学士課程の間に学生が身につけるべきスキルや素養について、各カレッジと合意している。大学はこれらのスキルや素養の開発のための機会を用意することに責任を持つが、それらを活用するか否かは学生側の責任としている。

全ての学生が身につけるべきスキル (Skills to be developed by all students) :
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 知的スキル (intellectual skills) : 批判、分析、合成、課題解決など</li><li>・ コミュニケーション (communication skills) : 文書と会話による</li><li>・ 管理的スキル (organizational skills) : 自立して働く、イニシアティブをとる、時間が管理できる、など。</li><li>・ 対人スキル (interpersonal skills) : 他者と一緒に働く、他者をやる気にさせる、柔軟性や適応性、など。</li></ul>
特定のコースによって身につくが、全ての学生に求められるスキル :
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 研究スキル (research skills)</li><li>・ 数量的能力 (numeracy) : 統計スキル、データ処理など。</li><li>・ コンピュータリテラシー (computer literacy)</li><li>・ 外国語能力 (foreign language skills)</li></ul>

○ イギリス National Skills Task Force (2000) – ジェネリックスキル (Generic Skills)

イギリス教育技能省 (DfES: Department of Education and Skills (当時)) による「スキルに関する検討タスクフォース」の最終報告(2000年)において挙げられているもの。

基本スキル (Key Skills) :
<ul style="list-style-type: none"><li>・ コミュニケーション (communication)</li><li>・ 数量的能力 (application of numbers)</li><li>・ 情報通信活用 (Information Technology)</li><li>・ チームワーク (team working)</li><li>・ 自己の学習と能力の向上 (improving own learning and performance)</li><li>・ 問題解決 (problem solving)</li></ul>
基本スキル以外に雇用者が求めるスキル、態度 :
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 合理的思考力 (reasoning skills)</li><li>・ 業務の運営管理能力 (work process management skills)</li></ul>

## 【オーストラリア】

### ○ オーストラリア **Graduate Skills Assessment**—ACER テストにおける 4 要素

オーストラリア教育研究審議会 (ACER: Australian Council for Educational Research) が教育・訓練・青年省からの委託を受けて実施しているスキル測定の試みとして 2000 年から試行。大学入学時と卒業時に以下のような観点からジェネリックスキルを測定。2000 年卒業時テストには 19 大学 (1600 名) が参加、2001 年入学時テストには 20 大学から 2000 名の学生が参加し、統計的なデータが整いつつある。卒業要件との関連はなし。

現在のテスト項目： <ul style="list-style-type: none"><li>・ 文章力 (written communication)</li><li>・ 批判的思考力 (critical thinking)</li><li>・ 問題解決能力 (problem solving)</li><li>・ 相互理解力 (interpersonal understanding)</li></ul>
追加が考えられる項目： <ul style="list-style-type: none"><li>・ 基本スキル (basic skills)</li><li>・ 処理スキル (management skills)</li><li>・ 情報スキル (IT skills)</li><li>・ 調査スキル (research skills)</li></ul>

### ○ シドニー大学—**Graduate Attributes (1993)**

シドニー大学のポリシーとして、卒業生が専門分野によらず備えるべき素養を規定したもので、アカデミックボード (学術評議会) の決定による。学内の評価プロセスを通じて状況を把握することによって、これらの素養に関わる教授学習の質を保証。

卒業生が備えるべき素養 (Attributes)： <ul style="list-style-type: none"><li>・ 学識 (Scholarship) : 知に対する態度、スタンス</li><li>・ 世界市民性 (Global Citizenship) : 世界に対する態度、スタンス</li><li>・ 生涯学習 (Lifelong Learning) : 自己に対する態度、スタンス</li></ul>
素養を構成する能力 (Skills and Abilities)： <ul style="list-style-type: none"><li>・ 調査と探求 (Research and Inquiry)</li><li>・ 情報リテラシー (Information Literacy)</li><li>・ 人格的、知的自律性 (Personal and Intellectual Autonomy)</li><li>・ 倫理的、社会的、職業的理解 (Ethical, Social and Professional Understanding)</li><li>・ コミュニケーション (Communication)</li></ul>

## 【OECD】

- 平成18年6月にアテネにおいて開催された「OECD非公式教育大臣会合」において、グリアOECD事務総長から学習成果の評価に関する提案がなされ、大臣会合議長サマリーにおいて、以下の内容が盛り込まれた。

- ・ 初等中等教育段階のPISAの成功を踏まえ、高等教育機関が付加する価値を学生の学習成果の観点から評価する、類似の方法論を検討すること。
- ・ 国内外における高等教育の目的、消費者、提供者の多様性を反映させた教育の質に係る多面的な基準が必要なこと。
- ・ 評価システムは政府及び教育機関双方が、自ら高等教育の質を高めることが出来るようなものであることが必要なこと。

- OECD専門家会合が3回開催され、フィージビリティ・スタディ実施にあたっての検討を行った。
- 平成20年1月に東京で開催された「OECD非公式教育大臣会合」後の記者会見において、渡海文部科学大臣（当時）がフィージビリティ・スタディに我が国が参加する意志があることを表明。
- OECDより提示されている4つの分野について、工学を一位とし、OECDに参加を申し込んだところ。

### <参加分野の順位と主な理由>

1. 工学
2. 背景情報（学生教員比率、図書館蔵書数、カウンセリング体制等の教育環境）
3. 一般的技能（批判的思考力、分析的論理づけ能力、問題解決能力等）
4. 経済学

※OECDに対し、4分野について優先順位をつけて回答

### <参加国・参加機関>

各分野について、約4ヶ国からそれぞれ10機関程度の参加を予定

### <実施期間>

2008年～2010年

## 参考資料9 アメリカにおける多様な学習アセスメント

○ 学習アセスメントは、教授（ティーチング）と学習（ラーニング）との相互関係の過程や結果を測る活動であり、その測定結果に基づき、学生の発達を支援することを目的としている。最近の先進諸国の大学改革において、学生の身に付ける「学習成果」が重視され、また、政府や大学の説明責任の必要性が強調される共通的な傾向が見られる中、学習アセスメントの重要性も高まってきている。OECDにおける「学習成果」の国際調査をめぐる動きも、こうした背景の下で生じている。

しかし、大学教育の学習アセスメントは、単に卒業時等の「学習成果」をテストで測るだけのものではない。学習アセスメントが最も活発な国は、アメリカであると考えられるが、同国では、多様な種類の活動が展開されている。ここでは、その実態を紹介して、今後の我が国における議論の参考に供したい。

○ 大学教育に関する学習アセスメントは、実施の時点や測定対象等に応じ、①入学前の学習到達度の測定（「インプットのアセスメント」）、②大学での学習行動・態度等の測定（「プロセスのアセスメント」）、③大学での学習到達度の測定（「アウトカムのアセスメント」）に大別することができる。アメリカでは、これらのアセスメントが、個々の大学の学内だけでなく、標準的なテスト等の形態により普及している（別添参照）。その開発・実施の主体も、大学をはじめとする非営利団体、民間事業者、場合によっては州政府など様々である。

○ ①に関しては、例えば、SATやACT、アカデミックスキルテストなどがある。SATやACTは、アメリカの大学の入学者選抜の共通試験として普及し、各大学のアドミッション・ポリシーや募集活動の中で、客観的な基準等として活用されている。高校と大学との接続を確保する手段として、これらのアセスメントが重要な役割を担っている。なお、大学によっては、入学後も学生にSATやACTを受検させ、学力の伸びを測定する例もある。

○ ②に関しては、例えば、入学時の履修前基本データ取得用としてCSXQやCIRP、初年次終了時点でのNSSEやYFCYなどが広く活用されている。これらを組み合わせて活用することにより、初年次教育の点検・改善にも生かされている。より上級の学年でも、上記のNSSEの他、CSSなどにより、学生の行動・態度の他、満足度や経験に関するアセスメントが実施されている。

○ ③に関しては、例えばCLA（第一学年と最高学年で到達度を測定）、GRE（大学院入学者選抜に活用する目的の到達度評価）、MAPP（学士課程前半の一般教育の到達度評価）などがある。これらは、②と比すると、学力や知識の獲得度をより直接的に測定する点で違いがある。汎用的なスキルとして、批判的思考力（critical thinking）や問題解決能力（problem solving）などを評価するものの他、専門職団体が開発・管理するような、分野別の標準テストもある。これらも、GREが学士授与者の約3割が受験（アメリカ教育統計ナショナルセンター（NCES）による）するなど、広く普及している。

- このように、アメリカでは、多様な学習アセスメントが発達し、個別大学の枠を超えた質保証の基盤（インフラ）をかたちづくっている。大学評価において説明責任が強く求められる中、多くの大学は、テスト機関と契約して学習アセスメントを実施し、その結果を自己点検・評価の中で活用している。大学間のコンソーシアムによって学習アセスメントを実施し、相互評価を行う場合もある。説明責任が強く求められる公立大学については、州政府が特定のテストの利用を当該大学に求め、評価指標に用いる例もあり、また、公立大学協会（AASCU）は、各大学が各種のデータ（学生と両親の基礎情報、学習行動、在学中の付加価値）の収集を進めることを提案した（2006年）。さらに、アクレディテーション団体は、評価のための根拠資料として、アセスメント結果の提供を各大学に求めるようになってきている。

最近では、連邦教育長官諮問委員会の報告に基づき行動計画が策定され（2006年）、連邦政府がアクレディテーション団体に対し、評価基準における「学習成果」の一層の重視を求めている。こうした動きも背景に、全米カレッジ・大学協会（AAC&U）及び高等教育アクレディテーション協議会（CHEA）は、共同の報告書を発表し、「原則」（教育の卓越性を達成する一義的な責任が外部機関ではなく、大学自身にあること等）とともに、「行動」の規範（大学が教育のゴールを明確に示し、学生の到達度の評価・公表に一層力を入れていくこと等）について宣言している（2008年）。

- 以上のとおり、アメリカで普及し、今後更に強化されようとしているアセスメントについては、その実施を支えている人材の在りようにも留意する必要がある。専門の教育心理学者などアセスメントの開発を担う人材が多数存する他、学内には、評価データを科学的に処理するインスティテューショナル・リサーチャー（IR）の職員や部署（大学調査センター（Office of Institutional Studies））が置かれ、IRの学会も活動している

- 一方の日本では、教育再生会議が、「学術関係団体や民間機関による学力検定の実施等の仕組みを作り、大学卒業程度の学力や能力の保証に資するようにする」等の提言を行った（「第三次報告」（平成19（2007）年））。また、「学習成果」に関するOECDの国際調査については、そのフイージビリティ・スタディに日本として参加する意志を表明した。さらに、企業においては、採用活動の一環として、民間事業者による基礎学力等のテストを広く利用するようになってきている。しかし、大学関係者の間では、日本学生支援機構や研究者個人ベースの学生調査は存するものの、総じて大規模なアセスメント活動は低調に止まっている。

今後、我が国においても「学習成果」の評価・測定に関する議論を深めていくことが重要であるが、単に「出口」のアウトカムのみを目を奪われるのではなく、アメリカの例に見られるとおり、大学入学前を含め、各段階にわたる多様なアセスメントの在り方、その実施を可能とする環境整備の在り方について、幅広い観点から検討していくことが必要である。このことは、大学の自己点検・評価をはじめ、大学教育の質保証の強化に向け、欠かせないものとする。また、留学生受入れを積極的に進めていく際に求められる条件整備の一つとしても、留意する必要があるだろう。

(別添)

## アメリカにおける学習アセスメントの取組の例

### ○ SAT

大学入学試験委員会 (The College Board) が教育テスト事業団 (Educational Testing Service : ETS) に委託して実施する試験で、大学進学後の学業上の成功可能性を評価することを目的とし、大学入学の際の共通試験として利用されている。言語能力 (Critical Reading)、文章表現 (Writing)、数学 (Mathematics) の3領域から成る。また、各科目 (英語、歴史・社会学、数学、自然科学、語学の5分野) の試験である SAT Subject Tests を利用する大学もある。テストの形式は多肢選択方式を主 (文章表現については小論文作成も課される) とする。年間の受験者数は延べ200万人以上。

### ○ The Collegiate Learning Assessment (CLA)

教育支援協議会 (Council for Aid to Education) が実施する、大学生の到達度を測定する試験。実践的作業 (Performance Tasks) や書き出しの定型語句 (Written Prompts) を用いて、学生の批判的思考 (Critical Thinking)、分析的論理付け能力 (Analytic Reasoning)、文章表現能力 (Written Communication)、問題解決能力 (Problem Solving) を評価する。第1学年時と最高学年時において学生を評価することで、学生の付加価値を各機関ごとに評価することを目的としている。

### ○ Measure of Academic Proficiency and Progress (MAPP)

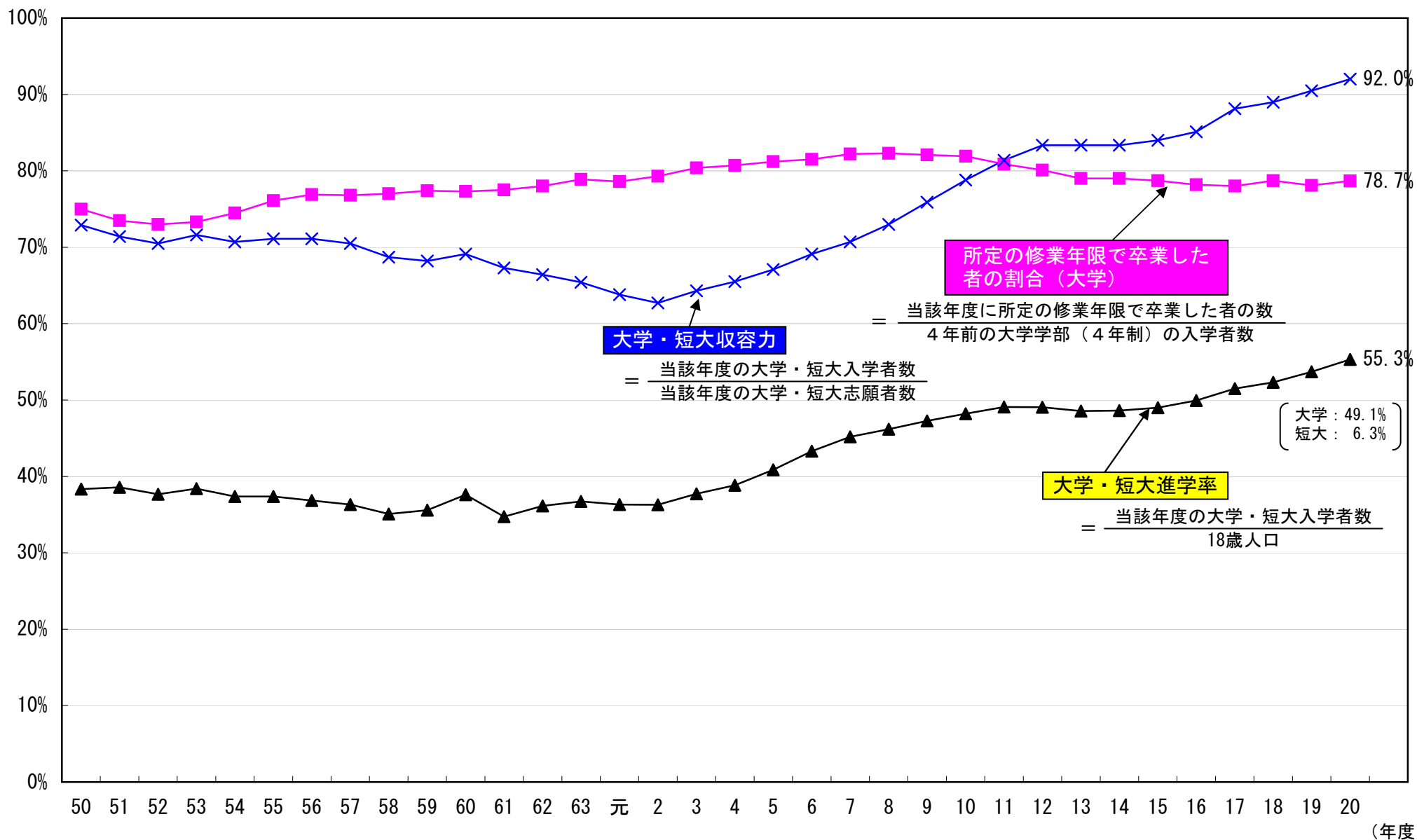
教育テスト事業団 (ETS) が実施する、主に学士課程前半の学生を対象に一般教育 (General Education) の到達度を測定する試験。選択式試験 (文章表現能力については小論文作成) で、学生の批判的思考 (Critical Thinking)、読解力 (Reading)、文章表現能力 (Writing)、数学的能力 (Mathematics) を評価する。試験の結果は、各大学のカリキュラム向上等のための資料や、アクレディテーション等の指標として使用されることが意図されている。

### ○ Graduate Record Examination (GRE)

教育テスト事業団 (ETS) が実施する試験で、大学院入学志願者の選抜等に利用されることが意図されている。共通テスト (General Test) と分野別テスト (Subject Test) の2種類が用意されている。共通テストは、言語能力 (Verbal reasoning)、数量的能力 (Quantitative reasoning)、批判的思考と分析的記述 (Critical thinking and analytical writing) の3分野について実施され、特定の学問分野に限られない一般的な技能を測定する。分野別テストは生化学 (Biochemistry)、細胞分子生物学 (Cell and Molecular Biology)、生物学 (Biology)、化学 (Chemistry)、コンピュータ化学 (Computer Science)、英文学 (Literature in English)、数学 (Mathematics)、物理学 (Physics)、心理学 (Psychology) の各分野についての学生の到達度を測定する。学士授与者の約3割 (40万人余り) が受験している。

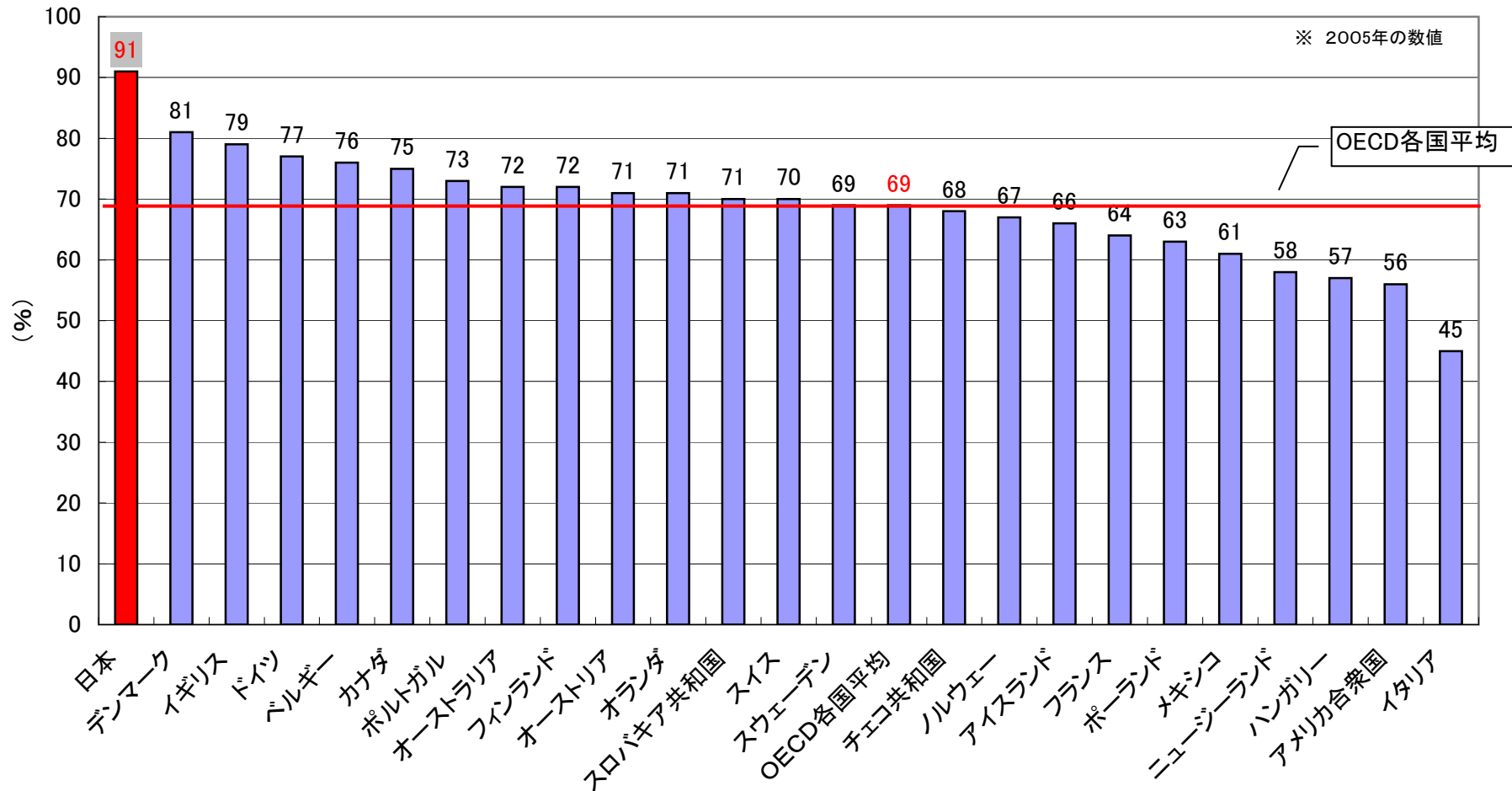


## 2-1 所定の修業年限で大学を卒業した者の割合の推移



※「所定の修業年限で卒業した者の割合」は修業年限が4年である大学学部の入学者数・卒業者数をもとに算出しており、4年以外の修業年限の学部や短期大学については含まれていない。  
 文部科学省「学校基本調査」より作成  
 (ただし平成20年度は速報値)

## 2-2 大学型高等教育修了率の国際比較



(注1) 「大学型高等教育(ISCED5A)」とは、主として理論中心・研究準備型プログラムで、通年教育年数がフルタイム換算で3年間(一般的には4年以上が中心)のもの(日本では、学士・修士に相当)。

(注2) 大学型高等教育の修了率は、大学型高等教育の卒業生数を、その標準的な入学年(修業年限)の入学人数で除した値である。

(出典)OECD「Education at a Glance 2008」

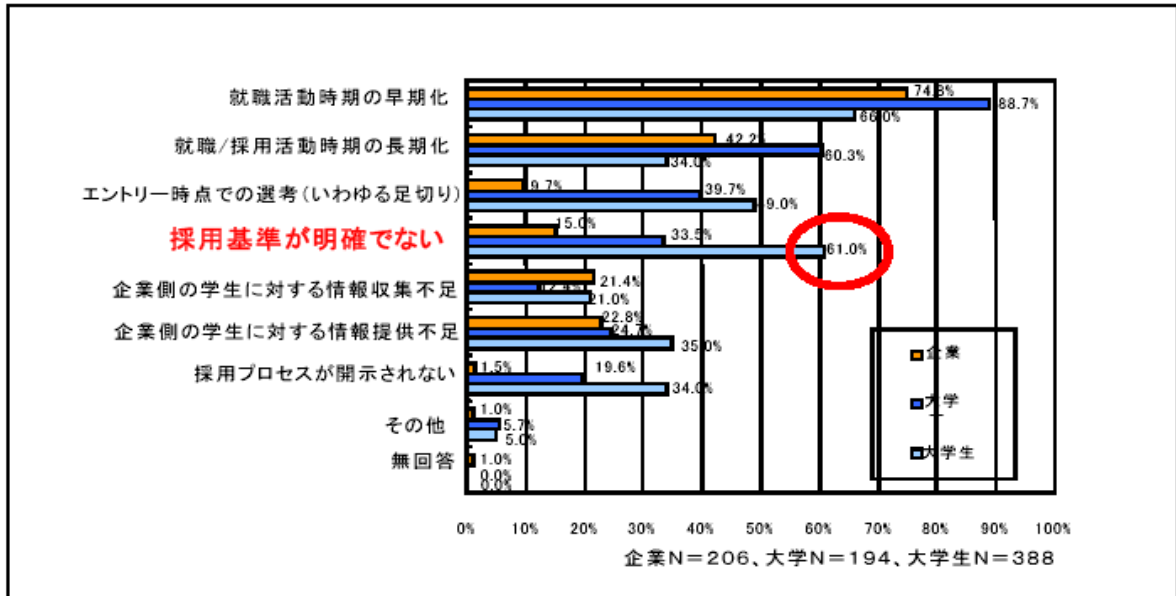
### 2-3 学位に付記する専攻分野の名称の数の推移

平成	11	12	13	14	15	16	17
学士	382	444	451	486	523	556	<u>580</u>
修士	277	310	324	362	411	440	467
博士	188	216	240	260	288	296	320
専門職学位	-	-	-	-	-	22	30

(注) 本調査結果は、(独) 大学評価・学位授与機構が、全国の国公私立大学に対して、学位を授与する際に付記している専攻分野の名称について調査し、その数を集計したもの。平成17年の場合、726大学に対し調査を実施し、回答数が664校(集計率91%)。

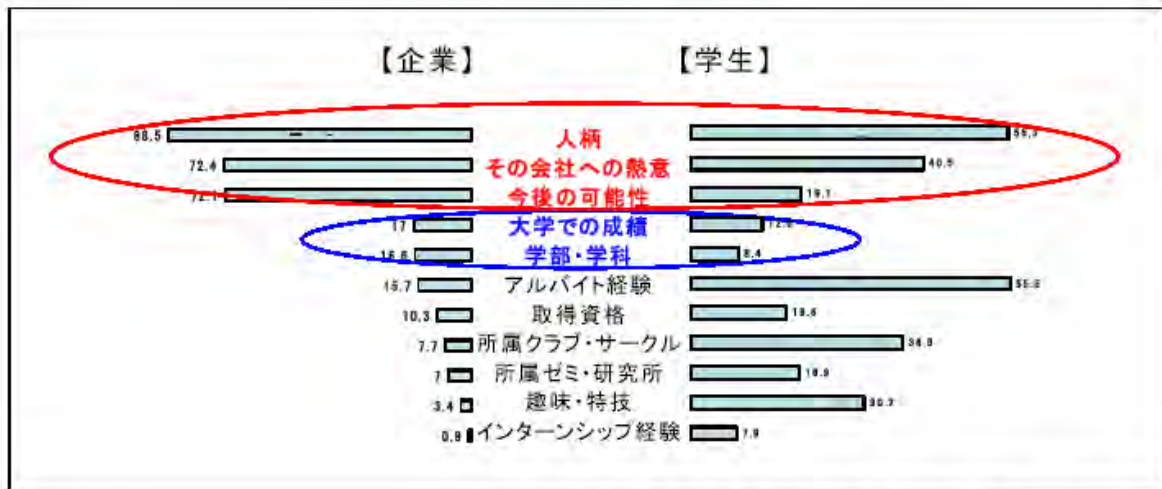
## 6-1 企業の採用活動における諸課題

### ○ 新卒採用プロセスにおける問題点



資料：経済産業省「社会人基礎力に関する調査」(2005年)

### ○企業が採用基準で重視する項目と学生が重視されたい項目



資料：経済産業省「社会人基礎力に関する調査」(2005)

(出典) 経済産業省「「社会人基礎力」育成のススメ～社会人基礎力育成プログラムの普及を目指して～」(2007)